

配送料はまだまだ上がる

ディズニーシー
拡張決断の実情

明治28年11月14日第3種郵便物認可
第6809号 2018年8月25日発行
毎週土曜日発行(8月20日発売)
ISSN0918-5735

Weekly
Toyo Keizai

週刊 東洋経済

2018
8/25
定価690円

物流 危機は 終わらない

正念場のヤマト 逆風下の集配体制再建
日本郵便・横山社長「値上げは始まったばかり」
独自配送網を築く楽天、アスクル、ヨドバシ
アマゾン物流部門トップに直撃！

京都の伝統野菜「九条ねぎ」で進む 生産・受注予測を組み合わせた農作物の安定供給化

「一般的な飲食店でも九条ねぎを使ったメニューが増えてきた。背景には、供給の安定化がある。京都産九条ねぎの約20%を生産する農業生産法人の「こと京都」、農や食の研究機関である「農研機構」は、イーサポートリンクのシステムによって、さらなる安定供給を目指している。

イーサポートリンク

トする時期や量を変えることで、需要が多い時期に供給量を増やすといった生産調整を図ることが容易になります」(岡田氏)

情報を共有できるシステムを開発する

こうして生産の安定化を図ったうえで次に重要となるのが、流通面での情報共有システムの整備だ。イーサポートリンク代表取締役社長の堀内信介氏は次のように語る。「スーパーやコンビニ、飲食店としては、特定の野菜の供給が減ることがあらかじめわかっていれば、代替品を準備するなどの対策を講じることが可能です。ところが現実には、農作物は安定供給が難しいことから、直前にならないとどれだけの量を入荷できるかわからないという問題がありました。これはユーザー側にとっては、非常にリスクが大きいことです」

テムを手掛けるイーサポートリンクと共に、課題解決に向けた3カ年のプロジェクトに取り組んでいる。今年はプロジェクトの2年目にあたる。九条ねぎの安定供給のためには、何よりもまず生産を安定させることが不可欠となる。農研機構の野菜生産システム研究領域長の岡田邦彦氏は、長年露地野菜を対象に、環境条件と農作物の関係性をデータに基づいて解析し、農作物ごとに生育モデルを立てることに取り組んできた。九条ねぎについても生育モデルを確立すれば、生育状況をモニタリングしながら、どの時期にどの程度の収量が見込めるかの生育予測を立てることが可能になる。

生育予測ができれば生産調整も可能になる

17年前、京都の伝統野菜の九条ねぎに目を付けたのが、こと京都代表取締役の山田敏之氏だ。生産者に委ねられていた九条ねぎの供給を安定化すれば、飲食店での通常メニューとして採用され、需要量が拡大すると見込み、脱サラをして農業生産法人を設立。九条ねぎの安定供給に取り組んできた。現在は、京都市内、亀岡市、南丹市美山町の3エリアに自社農場を持つほか、約40軒の地元生産者と連携することで、年間約1200トの九条ねぎを生産・加工・販売する6次化モデルを展開する。取引先は、ラーメン店などの飲食店が6割、スーパーが4割だ。さらなる安定供給を目指し、農林水産省の「革新的技術開発・緊急展開事業」を活用、農研機構、生鮮青果流通業界向けの管理シス



イーサポートリンク
代表取締役社長
堀内信介

こと京都
代表取締役
山田敏之

農研機構
野菜生産システム研究領域
野菜生産システム研究領域
領域長
岡田邦彦



京都伝統野菜の九条ねぎは、内側にほかのねぎにはないぬめりがあるのが特徴。ぬめりは「餡(あん)」とも呼ばれ、香りと甘みが凝縮されている。

若い経営者に積極的にシステムを紹介したい

亀岡市、美山町の3カ所に分散しています。そのため毎週各農場の担当者が集まって生育会議を開催し、生育状況の確認や出荷計画についての調整を行っています。けれどもこのシステムができれば、頻繁に顔を合わせなくても、スマートフォンなどで情報共有をすることが可能になります」

前述したように、このプロジェクトは今年、3カ年計画のうちの2年目に入っている。基礎となる生育モデルに基づいた生育予測、システムの確立は、ともに今年度中には試験運用ができる段階にまで持っていき、来年度は試験運用をしながら修正を図り、完成に近づけていく予定だ。

こと京都、農研機構、イーサポートリンクの三者は、さらに一步その先についてもすでに構想を描いている。

「生育モデルが確立できれば、生育が遅れたり、収量の低い農地があつたりしたときに、何が原因でどんな対策を講じればいいのか、データに基づいてロジカルに判断することができるようになります」



美山町の九条ねぎ収穫の様子。こと京都では、栽培時期とエリアを10月〜7月は京都市内、7月〜3月は亀岡市、7月〜11月は美山町とリレーしている。

今後は生育モデルを、こと京都の九条ねぎの生育診断や栽培改善にも活用していきたいと考えています」(岡田氏)

一方イーサポートリンクが新たに着手しているのが、九条ねぎの受注予測と生産・加工計画をマッチングするシステムの開発だ。

「飲食店やスーパーからの受注データを分析すれば、どの時期にどれだけの発注があるか、月単位はもちろんのこと、曜日単位で予測するのは、決して難しいことではありません。高い精度で受注予測ができれば、それに沿って生産計画や加工計画が立てられます。発注を受けてから、その都度準備

をして配送するという受け身の姿勢ではなく、生産者側が受注計画を先導できるようにするわけです」(堀内氏)

こと京都の山田氏は、システムが安定的に運用されるようになつたときには、「ほかの生産者にもこのシステムを積極的に紹介していきたい」と語る。山田氏は日本農業法人協会の会長を務めており、多くの農業法人経営者とのネットワークがある。

「農業の世界では、特にこの5年ぐらいの間に、意欲の高い50代以下の若い経営者がどんどん出てきています。彼らであればこのシステムを、安定供給や売り上げ拡大に効果的に活用してくれると期待しています」

また山田氏は、こと京都のほかにも、日本全国のねぎ生産者と連携し、これを束ねて付加価値の高いねぎの共有を目的としたねぎの専門商社「こと日本」という会社も経営している。安定供給のためのシステムは、こちらでも取り入れていく予定だ。

今回のプロジェクトで得られる知見や成果は、こと京都、農研機構、イーサポートリンクの三者の枠組みを超えて、全国に広がる可能性を秘めている。